

# Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: from Staten Island Ferry in 1991)

## 《スタッテン・アイランド・フェリー》

今回は今も昔もニューヨークの名物のひとつであるスタッテン・アイランドとマンハッタンを結ぶスタッテン・アイランド・フェリーについて。

マンハッタンの最南端に位置する公園バッテリー・パークとスタッテン・アイランドの St. George をつなぐこのフェリーは、元々観光用ではなく、スタッテン・アイランドで暮らす人々の通勤・通学用のフェリーとして開通され、1700 年代に個人営業のような形で小さなヨットを用いて始められたという。

自分が暮らしていた当時は往復 50 セントだった記憶があるが、1997 年から無料となり現在も無料のまままだそうだ。

運行スケジュールは地下鉄と同じく 24 時間営業で片道 25 分ほどかかるが、このフェリーと並行するような形で運行されているのが、あの自由の女神があるリパティ・アイランドへ行くフェリーで、こちらはさすがに人気スポットだけあって、連日長蛇の列でチケットも購入しなければならない。4 年間ニューヨークで暮らしていたが、恥ずかしながら一度も自由の女神があるリパティ・アイランドを訪れることはなかった。それというのも、このスタッテン・アイランド・フェリーに乗れば、なかなか良い位置、良い距離感で自由の女神を見ることができるから。スタッテン・アイランドに向かってゆっくりと揺られること 10~15 分。フェリーの右手に自由の女神がそびえ立つ姿が見えてくる。間近で見る自由の女神もきつと素敵なのだろうが、ちょっと離れて見る姿の方が美しいのではないだろうか。自由の女神が近づいてくると、フェリーに乗り合わせた人々から歓声が上がリ、カメラ片手に自由の女神の姿を食い入るように見つめる姿が毎回見受けられた。

個人的にこのスタッテン・アイランド・フェリーはニューヨーク観光では一番のお薦めで、ニューヨークに初めて訪れた知人・友人たちには最初に必ずこのスタッテン・アイランド・フェリーに案内していた。このフェリーはデッキにも出れるが、フェリーがバッテリー・パークから離れてから後方のデッキに出て眺めるマンハッタンのビル群の壮大な景色は本当に素晴らしく感動的だった。だが、とても残念なことにあの 9・11 事件で崩壊したツイン・タワーがなくなって以降、その外観は少し寂しく感じられる…。ツイン・タワーがそびえ立っていた当時の景色は格別で、特に夕方、太陽が沈みかけてきた頃に乗り合わせて、オレンジ色の夕日に照らされたマンハッタンの景色は最高だった。勿論、昼間に見る景色も十分美しく、早朝、夜の時間帯もまた異なる趣があった。

行き先のスタッテン・アイランドに関しては、マンハッタンとは全く異なりエンタテイメント性を感じさせるような場所はほとんどなかったと記憶しているが、毎回フェリーがスタッテン・アイランドに到着後はそのままバッテリー・パークにトンボ帰りしていた。しいて言えば、バッテリー・パークにはメジャー・リーグ、ニューヨーク・ヤンキースの傘下（2 軍のような存在）にあたるスタッテン・アイランド・ヤンキースの本拠地である球場リッチモンド・カウンティー・バンク・ボールパークがあり、この球場は 2001 年完成し、スタッテン・アイランドのフェリー乗り場から程近いところにある。嘗てニューヨーク・ヤンキースに在籍していた松井秀喜選手もケガから復帰前の調整でスタッテン・アイランド・ヤンキースのユニフォームを着て試合に出ているのをニュースで見たことがあるが、1999 年の球団創立以来、2000 年、2002 年、2005 年、2006 年、2009 年と 5 度のリーグ優勝を飾るなど、ヤンキースと共にニューヨークのファンに愛され続けている。春や夏などにこのスタッテン・アイランド・ヤンキースの試合目当てにこのフェリーに乗ってスタッテン・アイランドを訪れるのもお薦め。

また、スタッテン・アイランド・フェリーには、サクソなどを吹くミュージシャンが乗り合わせて、ストリート・ミュージシャンのようにチップ目当てに演奏していることもあったが、ニューヨークではストリートや地下鉄駅構内で演奏するにもライセンス・許可が必要だったため、その分演奏もしっかりしており、マンハッタンを望む夜景を見ながら聴く演奏も最高だった。

自分も 21 歳の時に初めてアメリカを訪れ、アメリカ人一周人旅をした時に 3 日間だけニューヨークに滞在したが、その時もこのスタッテン・アイランド・フェリーに乗っており、その後ニューヨークで暮らし始めてからも度々このフェリーにはお世話になっていた。そして、本誌「Vol.16」のこのコーナーで《若きギタリスト》と題して、20 代前半の若さで自ら命を絶ったニューヨーク時代の仲間のことを記したが、彼の家はスタッテン・アイランドにあり、彼が亡くなった際に両親を訪ねた時にもこのフェリーに乗ってスタッテン・アイランドに向かったのをよく覚えている。その他、自分を訪ねにはるばる日本から来てくれた兄や大学の先輩や友人たちもみんなこのフェリーに案内していたし、自分にとっても本当に思い出深い場所で、今でも後方のデッキから見上げたマンハッタンのビル群の壮大な景色はしっかりと胸に焼き付いている。